



子どもの森づくり通信

(発行: NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク)

JP子どもの森づくり運動
参加園月例会報
(2015年8月号)

〒144-0054 東京都大田区池上 1-3-4 tel:03-5755-3213 fax:03-5755-3081
<http://www.kodomonono-mori.net> <mailto:info@kodomonono-mori.net>

「JP子どもの森づくり運動」とご縁をもたせていただいた方々に、活動情報をお送りさせていただいております。ご意見など賜れば幸いです。



夏の酷暑も一段落。山田町のどんぐりも元気に育っています。
今月号の「子森通信」は、春につぎ夏の特別号として拡大版をお送りします。

(目次)

1. 特別寄稿「蚕を飼う保育」
2. 事務局からのお知らせ
 - 新・どんぐり博士の育苗講座 (2015年8月号)
 - ～秋が近づき水やりも変わります～

■「JP子どもの森づくり運動」とは

今、子どもたちは、高度な情報化社会の中でバーチャルな環境に取り囲まれ、本物の自然体験活動から遠ざけられています。しかしながら、子どもたちは、変化に富んだ自然体験活動の中でこそ、五感を通じて豊かな感性や健全な環境意識、そして子ども本来の生きる力を育みます。「JP子どもの森づくり運動」は、NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク(「子森ネット」)が「日本郵政グループ」との協働体制で、全国の幼稚園・保育園を拠点に、一貫した森づくり活動を通じて幼児期の子どもたちに自然体験活動と環境学習の場を提供しようという全国運動です。

■「JP子どもの森づくり運動」運営体制

- ・運営 : NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク(「子森ネット」)
- ・特別協賛 : 日本郵政グループ
- ・後援/協力

(公社) 全国私立保育園連盟	(公社) 大谷保育協会
(公社) 国土緑化推進機構	NPO法人C・C・C富良野自然塾
(一社) 日本森林インストラクター協会	NPO法人自然体験活動推進協議会
NPO法人MORIMORI ネットワーク	(一社) 日本オート・キャンプ協会
(株) 実業之日本社 月刊ガルヴィ編集部	保育環境研究所ギビングツリー



1. 特別寄稿

2015年春につづき夏の特別号として、「たかつかさ保育園」の藤井先生からの特別寄稿をお届けします。今年2月に大分県別府市にて開催された「子どもの森づくり運動」全国集会（研修会）における基調講演録を元に、新たに追記いただいたオリジナル原稿です。テーマは「蚕を飼う保育」。地域の人たち、及び異世代の人たちと取り組む意欲的な自然・環境学習活動事例として、まことに興味深いお話しです。園で取り組む活動の参考になればと思います。

「蚕（カイコ）を飼う保育」 OMEP日本委員会会長 たかつかさ保育園理事長 藤井 修氏

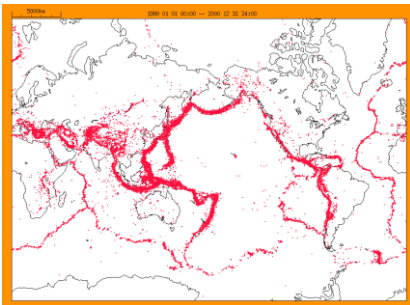
1) 地域と結びついた保育

京都の「たかつかさ保育園」の藤井です。今日のテーマは「蚕を飼う保育」です。なぜそういった保育を始めたかといいますと、園が「京都工芸繊維大学」の跡地にあり、その大学の前身は明治政府が輸出用の生糸の改良と研究をするために作った研究所でした。私どもの保育園は、地域の産業と結びついた保育内容を取り入れやすいエリアに立地していたことを前提とします。

たとえばこのような作品作りに取り組んでいます。（写真右）これは本来の蚕の飼育方法ではありません。本来は「まぶし」というものに入れて、その中で繭を作るようにします。ところが支点がないと、蚕がうろうろするだけになり、こういう凸面の上でも絹を吐きバルーンができます。これを園の玄関先でおこないました。初めて見る方にはグロテスクです。そんな訳で、「ちょっと止めてよ～、園長先生」と保護者によくいわれました。でも子どもたちは蚕を触るのが好きです。



ちょっとヒンヤリしますしツルツルしています。そして、糞が落ちてても全く臭いませぬ。食べているのが桑の葉だけです。とても清潔感があります。



では、なぜそういった生物を保育園の中で扱うのかという質問に答えるために、こんな地図も使っています。（写真左）これは、世界の地震分布地図です。地震地帯のまっただ中に私たちは住んでいます。ところがそこに触ってはいけないというテクノロジーが、今あの福島県にある訳ですね。この工業化社会の中で、私どもが培ってきた日本の文化が劣勢にまわっています。でも子どもたちは選ぶことなくこの私達の世界に入ってきてくれます。

子どもは、以前と変わったという人もいますが、自然の環境の中に連れて行きますと、私どもの感じていたような事をちゃんと感じてくれます。環境を整えれば自然と充分に向き合えます。そこで私どもの蚕を飼うという実践が、子どもたちの自然と直接向き合う体験の一環として実践されていることをまずはご理解頂ければと思います。

養蚕は衰退産業ですが、幸いにも長野県上田市に今も専業で卵を出荷している会社があります。そこから、卵が宅配便で参ります。飼育を始めたい日にちを伝えますと、その日の朝にチルドで届きます。最近どうも気温が高いので、空けたとたん「蟻蚕」（注1）という状態でもう孵っております。そこでみんなで桑の葉を切ってきて与えます。そうすると、サーと寄ってきて、桑の葉を、最初は液体を吸う感じで舐めております。どんどん大きくなってきて、「四回寝て五齢」（注2）へと生長していきます。これも全部玄関でやっています。



2) 地域の人たちとの交流

蚕の飼育の周期は短いです。2ヶ月で結果がでます。そして最終的に繭を取って、毛羽を取り繭玉にし、その後糸をひきます。子どもたちの前でやると、喜んで取り組んでくれます。このような保育を実践していると、近くの「帯の刺繍（シシュウ）」をやっているお婆ちゃんが、「絹でごはんを食べさせてもらっているから、孫達の活動を手伝ってあげるよ」と手伝ってくれます。それから繭（マユ）はタンパク質ですのでいろんな染料がすぐ染まります。



染色家によるアート作品づくり講座



シルクの像ができました。

こちらは元は西陣織の大会社の社長さんで、今はハワイ大学で草木染めの染色の指導をなさったり、絹で大きな作品を作ったりしているアーティストになったお爺さんです。保育園での活動を伝えたら園に来てくれ、絹のシート作りを指導して下さいました。子どもたちも力を合わせてシートを作り、ゾウ組さんだから、ゾウを作ってみようと言うことで、大きなゾウが出来ました。その他、色々な作品作りに取り組みました。冒頭のバルーン作りの道具を提供して下さったのもこの方です。

3) 広がるつながり「京都桑田村」

ところで、蚕の餌となる桑の葉は、最初は園庭にある桑で間に合っていたのですが、大きくなるととても足りません。京都工芸繊維大学で1キロ80円で購入していたのですが、なにせ研究用のものなので嫌がられます。そんな中、4人のお孫さんが園に通ったというお爺ちゃんがおられ、とても園を支援して下さいました。その方の実家があるご縁で京都府南丹市美山町に通い始めました。所有林の木を伐採して、製材所で丸太にし、それで筏を作っていただき、その



イカダで遊ぶというのが夏の合宿のメインイベントになりました。元々は芋畑を借りたのが始まりだったのです。そんな中、地元のNPOや限界集落支援員の仲介で京都府南丹市美山町豊郷地区のお年寄りに巡り合いました。元気なお年寄りに相談したことがきっかけで、かつての村の産業だった養蚕を再興しようという機運が生まれ、そして「京都桑田村」という大きなプロジェクトに結実しました。「京都桑田村」は、バーチャルな村です。町村合併する前、こちらが北桑田郡美山町と呼ばれていたことに由来します。



「京都桑田村」開村式

2014年10月31日

「桑田村」プロジェクトは、豊郷公民館の老人会の活性事業として発足しました。「桑田村」の開村式には「たかつかさ保育園」の子どもたちが記念植樹をしますと広報されました。この村は子どもが小学生を含めても私の園の一組より少ないので27人の園児が行ったら、「わあ、地元の小学校より多いや」「久しぶりに小さい子を見た」といってみなさん喜んでくださる、そういうエリアです。桑畑が新たに造成され、最終的には600本を植えていこうという壮大な計画が動き始めました。当日は、たかつかさ保育園の子どもたちの植樹を、村のお年寄りたちが総出でやってくれました。

開村式前日は、豊郷公民館に泊めていただきました、しばらく前まで使われていた足踏みの脱穀機で、園庭のバケツで育てた稲を脱穀させてもらい、唐箕（トウミ）に通して選別するなど、伝統的農作業を体験させてもらいました。その後、繭玉人形作りをお年寄りとしました。こういう交流をしているうちに、子どもたちがだんだん高揚してきました。初めて会ったお爺ちゃんお婆ちゃんなのですが、非常に子どもたちが親近感を持ちます。そして、お爺ちゃんお婆ちゃんも「どうもこの子はうちの孫に似ているね」とかそういう話が始まりました。



開村式に桑の木を植えました。



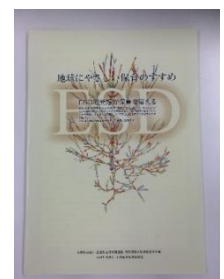
豊郷地区のお年寄りと繭玉人形作り

そして一緒にかまどで炊いたごはんを食べて、その後は宴会になりました。たまたま担任の一人が熊本出身で、熊本の「火の国太鼓」がその年の運動会の演目でした。それを踊るグループがありましたが、運動会とは全然違うパフォーマンスをしたのです。どうしたのと確認したら、子どもたちが宴会の直前にみんなで考えたのだといったのです。子どもの力が予想以上に発揮され、村のお年寄りも感激してくれました。地元の諏訪大社のお祭りの獅子舞いも見せて頂いて、大変盛り上がりしました。

4) ESDとしての取り組み

2014年11月名古屋で、ユネスコが推進するESD（持続可能な開発のための教育）の世界大会がございました。このESDというのは単に環境教育というのではなく、今の私達の生活水準というのが果たして将来も維持できるのか、将来の世代が今のレベルの快適な生活を維持するには、今何をしておかなければならないのか、と言うことが基本にあります。そして、なおかつ本当に今のやり方を続けていって、私達は平和な世界を維持できるのか、というそういう課題も投げかけています。日本国内ではユネスコ国内委員会とユネスコ協会が主導的役割をして、学校関係への普及に努力されたようですが、まだ乳幼児の段階へは十分普及しているとはいえません。

本日お配りした冊子は、「全国私立保育園連盟」の保育国際交流委員会の作成したものです。「保育通信」という機関誌に載せた連載記事をまとめて乳幼児期からESDが可能ではないかという実践集です。今日みなさんに配布して頂きました。全国の保育士のみなさんに「持続可能な開発のための教育」というのはこういうことが出来るのではと言うヒント集です。私どもが、保育内容に蚕を取り入れているのも、そこへつなげていくねらいを持つ一つの教育運動だと自負しております。



「全国私立保育園連盟」
ESD的発想が保育を変える



「TOY (Together Old Young)」
リーフレット

4) OMEP

実は私はOMEPという国際組織の日本委員会に所属しています。パリに本部があり、「世界幼児教育・保育機構」と訳されています。ユネスコとも関係が深く、スイスでの1999年に開催された「21世紀の幼児教育・保育」のシンポジウムの報告集がその後の研究も含めてユネスコから出版されました。その中に、この蚕の取り組みを掲載してもらいました。また2014年7月、アイルランドのコーク大学でのOMEP世界大会では、TOY (Together Old Young) という団体に会いました。この団体は、ヨーロッパの6カ国で活動している団体です。そこでは、55歳以上のお年寄りと5歳以下の子どもとの出会いを積極的につくる活動をしていました。



お年寄りというのは、何かとネガティブなイメージで見られがちですが、実は非常な知恵者であり、とても技能が豊かで、そして、伝統文化についてエキスパートなのだ。そういう方達に、これからの世代の子どもたちと積極的に接触をもらい、子どもたちに持っている物をどんどん伝えていただこう、一方、子どもたちはそもそも好奇心が旺盛で、とても素晴らしい学び手である。また、お年寄りは子どもたちの些細なことにも喜びを感じてくださる、そういう穏やかな性格になってきていらっしゃるのだ。是非子どもたちと地域の中で活躍して頂こうじゃないかと、この団体は訴えていました。

それで私も、蚕という昔日本の産業の中心であったものを、保育の中に取り入れてみたら、その仕事に詳しいお年寄りが関わりをもって下さいますという話をしました。「私達と一緒に事考えているのね」ということでとても仲良くなりました。1995年にOMEPの世界大会が横浜であった際は、スウェーデンの方が、子どもの権利条約を普及するためのパンフレットを、みなさんに配りました。それに、I have the right to a good lifeというページがございまして、イラストが子どもとお年寄りなのです。a good lifeとはこういうイメージなのだと言っていました。ここでまたつながってくるんですね。蚕のご縁で、地域社会が保育を通じて子どもたちを支援するという事例として、本日の私の話を受け取って頂ければ大変うれしく思います。

どうもご清聴ありがとうございました。

*注1：孵化したての蚕には黒い毛が生えているので蟻のように見えることからこのように呼ばれる。

*注2：脱皮の直前に「眠」という運動しない一日があり、五齢で熟蚕になって繭をつくりその中で蛹になる。

<事務局後記>

藤井先生とのご縁は、OMEP日本委員会の総会でした。2013年上海で開催されたOMEP世界大会の際に実施された「子どもの森づくり運動」のプレゼンテーションの際にも、いろいろお世話になりました。「たかつかさ保育園」さんには、現在、「東北復興グリーンウェイブ」参加園として東北の苗木を育てていただいております。ところで藤井先生は、ご自身のプレゼン資料の中で「蚕を飼う保育」の10年の成果として以下の項目をあげておられます。参考のためにご紹介します。



著者近影

2014年 OMEP「Cork大会」にて

<「蚕を飼う保育」10年の成果>

- 蚕は子どもが安心して取り組める飼育教材として定着。
- 芸術家のアイデアで、繭のアートを子どもたちが喜び、感動する体験を生んだ。
- 地域の身近な自然物を直接体験することで、子どもの心に、この土地の固有性と自分たちの幼児期を想起する手がかりとなる記憶を作った。
- 世代間の交流が拡大し、地域住民とのかかわりが増えた。
- そのお年寄りに子どもの元気で喜びの態度が伝わりさらなる援助を得ることになった。
- 伝統産業との連携 「南丹市豊郷」との交流へ。

2. 事務局からのお知らせ

1) 活動レポート動画配信のご案内

活動レポートを動画で配信する試みを始めました。

文字や写真では伝えきれなかった、子どもたちの生き生きとした動画ならではの活動風景をお送りしております。

是非、ご覧下さい。

●ユーチューブチャンネル「子森チャンネル」オープン

年4回程度、節目となる活動風景をお届けします。今回は、「東北復興グリーンウェイ」第二回植樹会のレポートです。

「子どもの森づくり運動」公式ホームページから、下記の手順でご覧になれます。

①「子どもの森づくり運動」公式ホームページ ⇒②子森チャンネル&通信 (TOP左上) ⇒③「子森チャンネル」

●日本郵政グループCSR動画

特別協賛企業「日本郵政グループ」のCSRページでも動画による活動レポートをご覧になれます。

①「子どもの森づくり運動」公式ホームページ ⇒②子森チャンネル&通信 (TOP左上) ⇒③日本郵政グループCSR動画

*現在、日本郵政株式会社のトップページからもご覧になれます。⇒<http://www.japanpost.jp/>

2) 活動参考本のご紹介

J P子どもの森づくり運動では、生物多様性の観点から苗木の植樹エリアについてはオリジナルの種の移動ガイドラインMAPを作成、活動当初より留意してまいりました。⇒<http://kodomono-mori.net/map-3>

そのガイドラインMAP作成の際にご協力いただきました独立行政法人森林総合研究所 遺伝子グループ

津村義彦先生 (現、筑波大学教授) が中心になって「地図でわかる樹木の種苗移動ガイドライン」(文一

総合出版/ ¥5,500+消費税) が出版されました。わたしたちの活動における大切なことが解説されています。

現在であれば著者割引による購入も可能とのこと。ご興味のある方は事務局までお問合せ下さい。

本の詳細 ⇒<http://www.bun-ichi.co.jp/tabid/57/pdid/978-4-8299-6524-5/Default.aspx>



●新・どんぐり博士の育苗講座 (2015年8月号) ~秋が近づき水やりも変わります~

秋の訪れは地域による差が大きいです。沖縄地方を除いて確実に秋は近づいています。前号は、盛夏中の苗への水やりについてでしたが、秋の天候になったら、それに合わせて水やりも変えます。今月号では、秋に向けての苗管理についてです。どんぐり博士：河内和男 (「子森ネット」森林インストラクター)



○猛暑で始まった今年の夏でしたが、東日本ではしのぎやすい日も増えてきました。しかし西日本を中心に残暑はもうしばらく続くでしょう。でも、季節は確実に進んでいます。夏から秋へ移っていくこの時期は、苗への水やりを季節の変化と共に変えて行く必要がある時期です。そこで、今回はその見極めと、秋の水やりについて説明します。

○残暑が続いていても、朝夕に涼しさが感じられるようになると、苗を育てている土の乾き方に変化が出てきます。真夏のようにすぐには乾かなくなります。ですので、これからは水を与える前に、土が含む水分量を確認して下さい。ある程度乾いていたら水を与えても大丈夫です。秋が深まると、天気が晴れでも土に湿り気が残っていることが増えてきます。そうなったら定期的な水やりの必要はなくなります。土が乾燥したときに水をやる程度でよくなります。地域の差があり、その状態になる時期を明言できませんが、土の湿り具合から、秋の深まりを感じ取って下さい。

○もうひとつ。夏までは苗を半日陰に置くことをお勧めしました。しかし定期的な水やりが必要なくなった後は、苗を日当たりのよい場所に置くといいです。特に東北グリーンウェイ用苗のように落葉する場合、よく日に当てておくと綺麗に紅葉する可能性が高くなります。小さな紅葉狩りが楽しみになりますよ。